

生の儚さと頑丈さを見せて 角永和夫「SILK」

コヨーテのみる・きく・あるく

©Kadonaga Kazuo 2006

縦八メートル、横四メートルの回転するアルミ枠が三台。その枠には白いネットが張られ、五万匹の蚕が放たれている。建物の窓から射す柔らかな光に促されるように、蚕は糸を吐き出し音をたてながら上に向かう。枠が回転するのは蚕の習性を考えて、彼らが均等に繭を作るバランスを取るためだ。数週間後には、白い絹の繭玉が無数に出現する。その過程を角永和夫はインスタレーションとして見せていく。

展覧会のタイトルは「SILK」。絹が生み出される過程を視覚化するとともに、さなぎが蛾に羽化するまでの過程そのものに、エロスとタナトスという芸術の本質を重ね合わせていく。と同時に観る者に、今では少なくなった養蚕という日本の伝統的な産業を思い起こさせる。

圧巻は、発電所美術館に足を踏み入れた途端に鼻を突いてくる蚕独特の刺激的な匂い。生き物の証である糞と尿が会場の床に垂れ流されているからだ。さらに死骸や蛾が作り出す鱗粉などの副産物もその衝撃に輪をかける。一つの素材が生成されてゆくまでの過程とはいかに。そこに浮かび上がる生の儚さは、どこまでも美しい。

思えば角永の関心は、これまで一貫して木や竹、ガラスなどの素材に向けられてきた。水の波紋や風紋などにもその姿勢は重なる。繭の壁もまた美術館の三枚の磨りガラスによって刻々と変化し、色を変える。まさに命を曳きだす壁となっていく。

十月の初旬から休むことなく刻み込まれてきた繭の壁の痕跡は、十二月の十七日で幕を閉じる。

角永和夫展「SILK」は、富山県・下山芸術の森「発電所美術館」にて、2006年12月17日(日)まで開催中。
くわしくは同館Hd(www.town.nyuzen-toyama.jp/nizayama)
またはtel: 0765-78-0621(ホ)